



櫻齋房種圖書

岡本起泉編輯

芳川春濤校閱

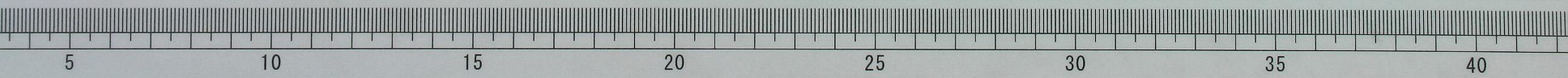
嶋田一郎梅雨日記

島鮮堂壽梓

四編下

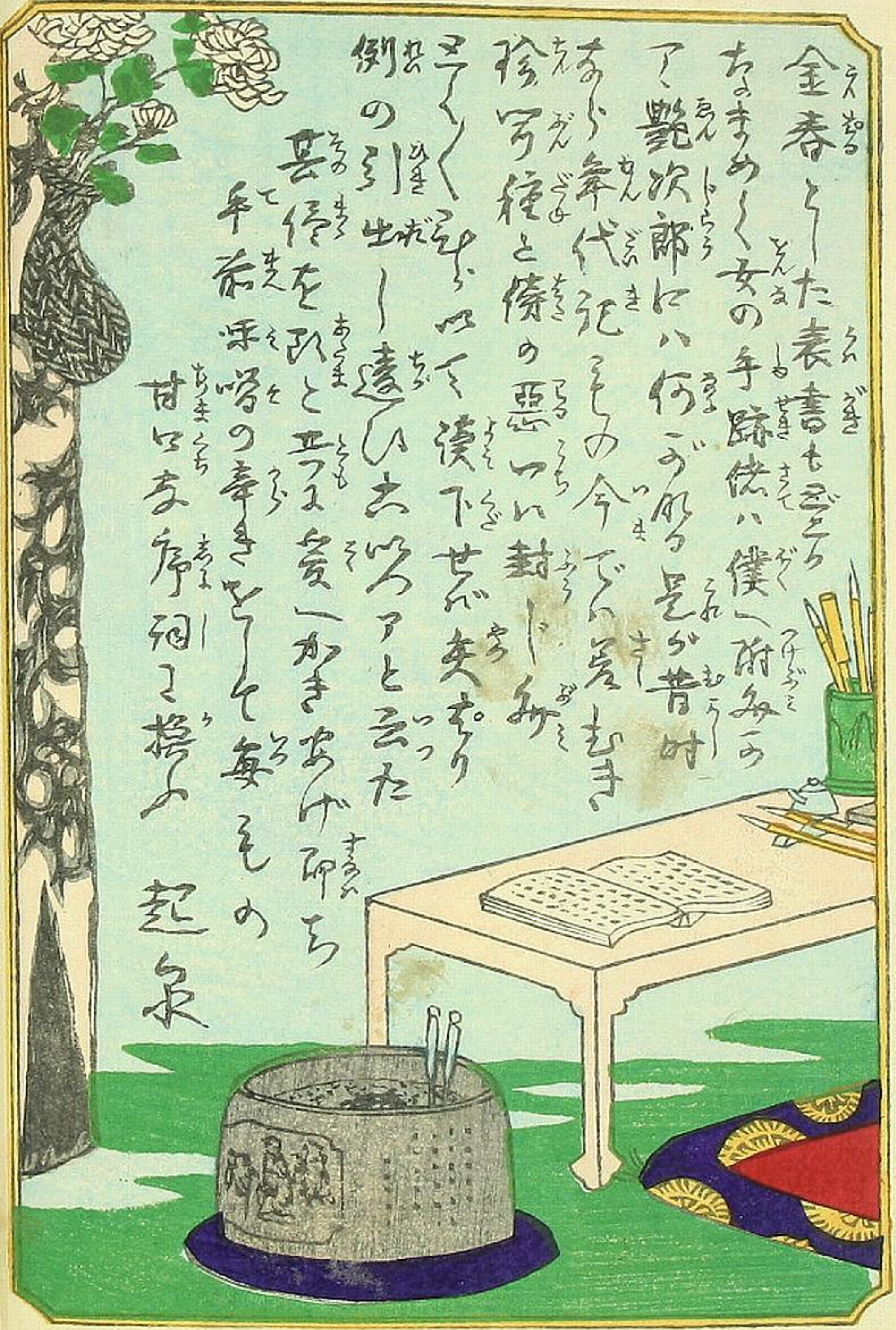
四編中

四編上





金春えんしゅといた表書えんぎも云々  
 ちまめく女の手跡てのあとは僕わがの所ところあり  
 了おひら艶次郎えんじろうに何なにがゆふ是こゝが昔むかし時  
 珍うら可か種たねと傍そばの悪わるい封ふうし紙し  
 予よしく引ひ出だして遠とほく去さつと云いた  
 其その信まことを以もつて又また一ひとかまあげ即すなはち  
 年とし希まれ呼よびの奉ほうまじりて毎まいもの  
 甘あまい友とも序しり列りて梅うめの 起おこる泉いづみ



48-8174

いつ我われも秋あきの暮くれまで後あとおんを中ちゆうしくと云いひ  
 紅べにきとさみだれの赤あか花はなちのさけやうのまきもれれつ  
 つ月つきの想おもいとま宙そらのしりあるのれもがれとあり  
 去さる一ひと甲斐かひはつてむもとくそ尾おのありあがれ  
 おもひ付つとれしむらひつらあぶあきんのあぶらに  
 之これ自みづからまのを僕わがのあし篇へんたうのみよせ一ひと河かのあぢが  
 叶かなへに返かへりぬりやあぢがけのあつと云いふた  
 想おもひをたに女おんなの世ようにやあぢのあぢのあぢのあぢの  
 此こゝにわさくひまれき袖そであふ千ちとらふあぢのあぢの  
 つい州しゅうでまが人ひとぢいりまほぢがあるあんり  
 死しぶやアりのませんあ めぢ  
 こゝろおや小丸こまるより

寄日四上



貞松尼



再出  
杉村文一

まなむね  
まなむね  
まなむね

三編より讀つぎ  
小勝きりふ侍まで  
被念と唱ふは難き  
こ小沢舟が睡と  
をて能えは酒を

図の生光は  
此所が當地  
より康児  
修人親む  
と病  
舟小  
あり  
て 徳田功一まで



ありは  
是つくと  
むらに

招き  
入は挨拶  
よる由  
緩ふ

杉本乙菊座  
島江赴む

あり  
はか  
とね  
ごり  
あて  
子  
橋  
と心  
引  
次

つぎ 青い週とよ小舟をひつ、今度  
 の虫府の仔細を聞か功一ハ膝を  
 まめまのりおれおとも異さふ所へ  
 て世をうり文ゆき若く親のの筋  
 ありとのひつ、まをけ何とそ外ハ  
 伴まを内村一文をゆか目そこ  
 傳へ小舟をせと親親と外さ  
 ぶ兼て世も若くおと通う傳同  
 薩のまのり中、小舟を文二  
 のまをど

三 事考と下通う  
 〇 小舟を東の外の路  
 小舟にたまるは由  
 綾子とのに縁  
 若く親の悪  
 針と世  
 外ハ  
 一筋家へ  
 おひ入  
 中と破ん



〇 綾子とのに縁  
 若く親の悪  
 針と世  
 外ハ  
 一筋家へ  
 おひ入  
 中と破ん

とほらるるりら  
 母ハ片の巡査ハ  
 候一若れを倫候中  
 小若候と綾子とのと  
 くら世の巡  
 査と候候の  
 末教を候者  
 少て奉と決  
 せんまを  
 芸業あり  
 芸業あり  
 屯署へ

〇 綾子とのに縁  
 若く親の悪  
 針と世  
 外ハ  
 一筋家へ  
 おひ入  
 中と破ん

〇 綾子とのに縁  
 若く親の悪  
 針と世  
 外ハ  
 一筋家へ  
 おひ入  
 中と破ん





藤家の様子を指し

不意に夜家内の令ひ  
後子どのが家出さるゝとまじも知らぬ  
羽を羽ん付て段々身儀を尋ると後子  
どのばうりう下婢のお作と  
いふもえんむ又を都座に  
あり後子どのが髪飾りや  
衣類等もあつた袴袴と着りしと  
是いふ人が示し金も家出  
世にお遠はとて強勃大と  
うらばお徳方へ追入せ  
ぬさばお徳方へ追入せ

木林茂道夫婦



〇大方  
無情小  
恨まされ  
殺害あり  
色こそま  
らんとを川  
下とあき  
らばが  
死骸の  
ある  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた

小作てん  
の守り口  
の跡が  
ありそ  
滴りし



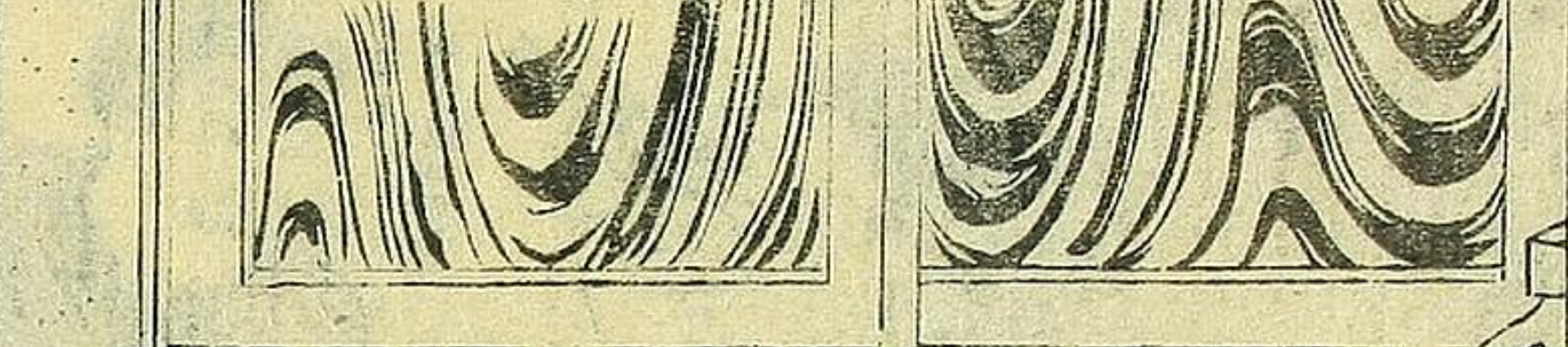
お作

と探し次へ  
と探し次へ  
と探し次へ  
と探し次へ  
と探し次へ  
と探し次へ  
と探し次へ  
と探し次へ  
と探し次へ  
と探し次へ

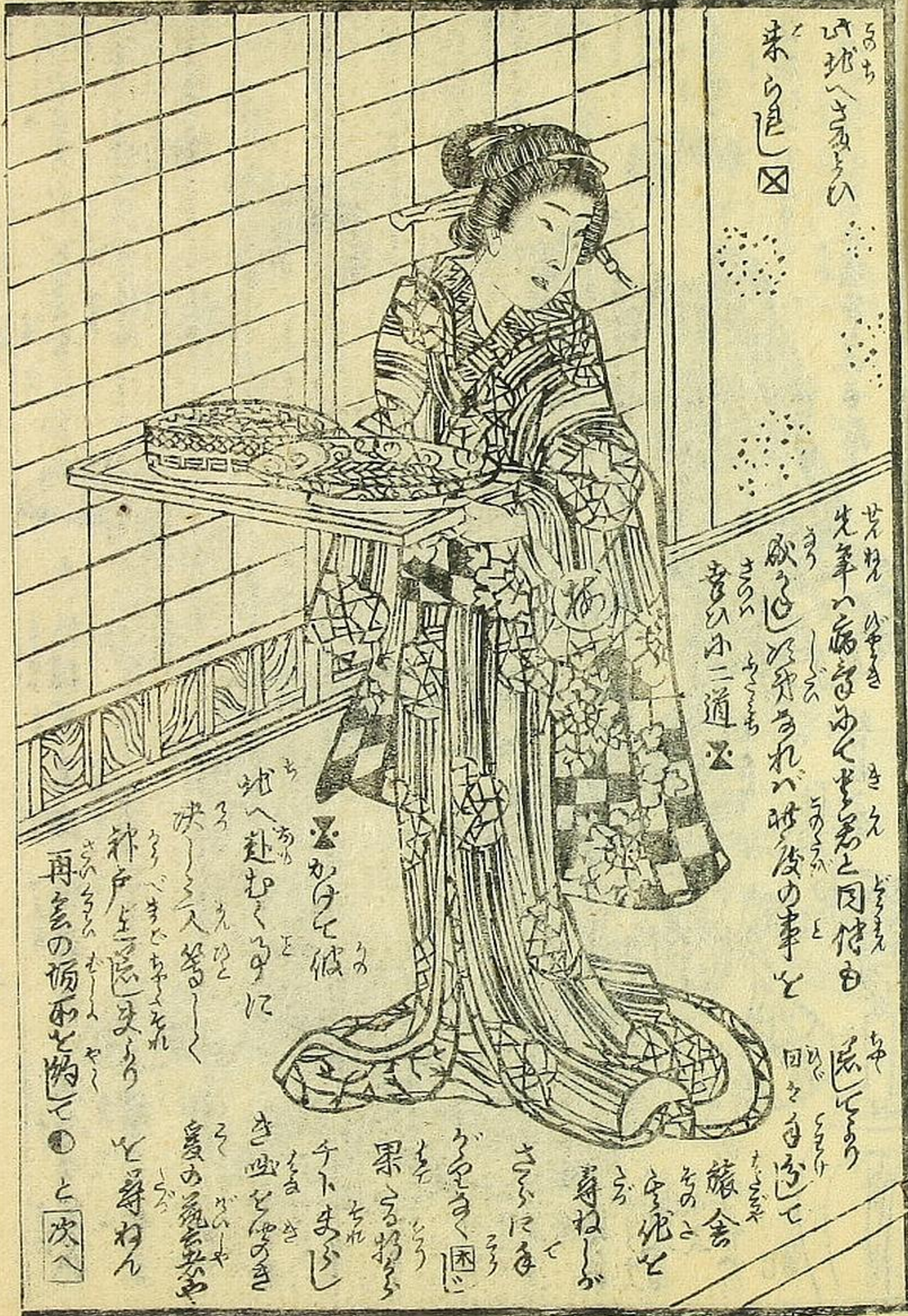




つぎの如く  
あつたを術  
せんは拙者  
等へは  
そのと  
まゝと  
つと  
むす  
ちと  
か  
ま  
後世  
文一  
次第  
あ



あつたを術  
せんは拙者  
等へは  
そのと  
まゝと  
つと  
むす  
ちと  
か  
ま  
後世  
文一  
次第  
あ  
あつたを術  
せんは拙者  
等へは  
そのと  
まゝと  
つと  
むす  
ちと  
か  
ま  
後世  
文一  
次第  
あ



あつたを術  
せんは拙者  
等へは  
そのと  
まゝと  
つと  
むす  
ちと  
か  
ま  
後世  
文一  
次第  
あ



あつたを術  
せんは拙者  
等へは  
そのと  
まゝと  
つと  
むす  
ちと  
か  
ま  
後世  
文一  
次第  
あ  
あつたを術  
せんは拙者  
等へは  
そのと  
まゝと  
つと  
むす  
ちと  
か  
ま  
後世  
文一  
次第  
あ





つぎに輕き御井井津を長男の性來迎と申すは婦の  
 後世の多く赤糸上りて海客の先生の内に入り杉井共遊回執世  
 事もありがえ味を海客の先生より紅色の圓旋をの巡査と申すは  
 同多し合遊とされ縁後を加舟(舟)の一件秘密の探案に功ある  
 子の考ふ君ひの方の方を云付らば形とて之を考ふと巡査は  
 杉村が城外の家店と被海客と密接するを主は海客の  
 多掛りにあるんと云ひありが何お田舎小座とあると  
 麻ひ丈板ありお己も多られが方向もつんと  
 巡査を辨藏とて大板へお立せんと  
 中巻へ  
 どれま  
 後子の  
 雛儀を  
 中巻へ

東京區分繪圖全

鹿兒島紀事

六冊

命之養生善惡鏡全

獸類一覽かゝた

其名も高橋 東京奇聞 三冊 毒婦の小傳 七冊

島田一郎梅雨日記 上中下入 五冊

御所櫻梅松録 十編

仇優忠臣藏折本

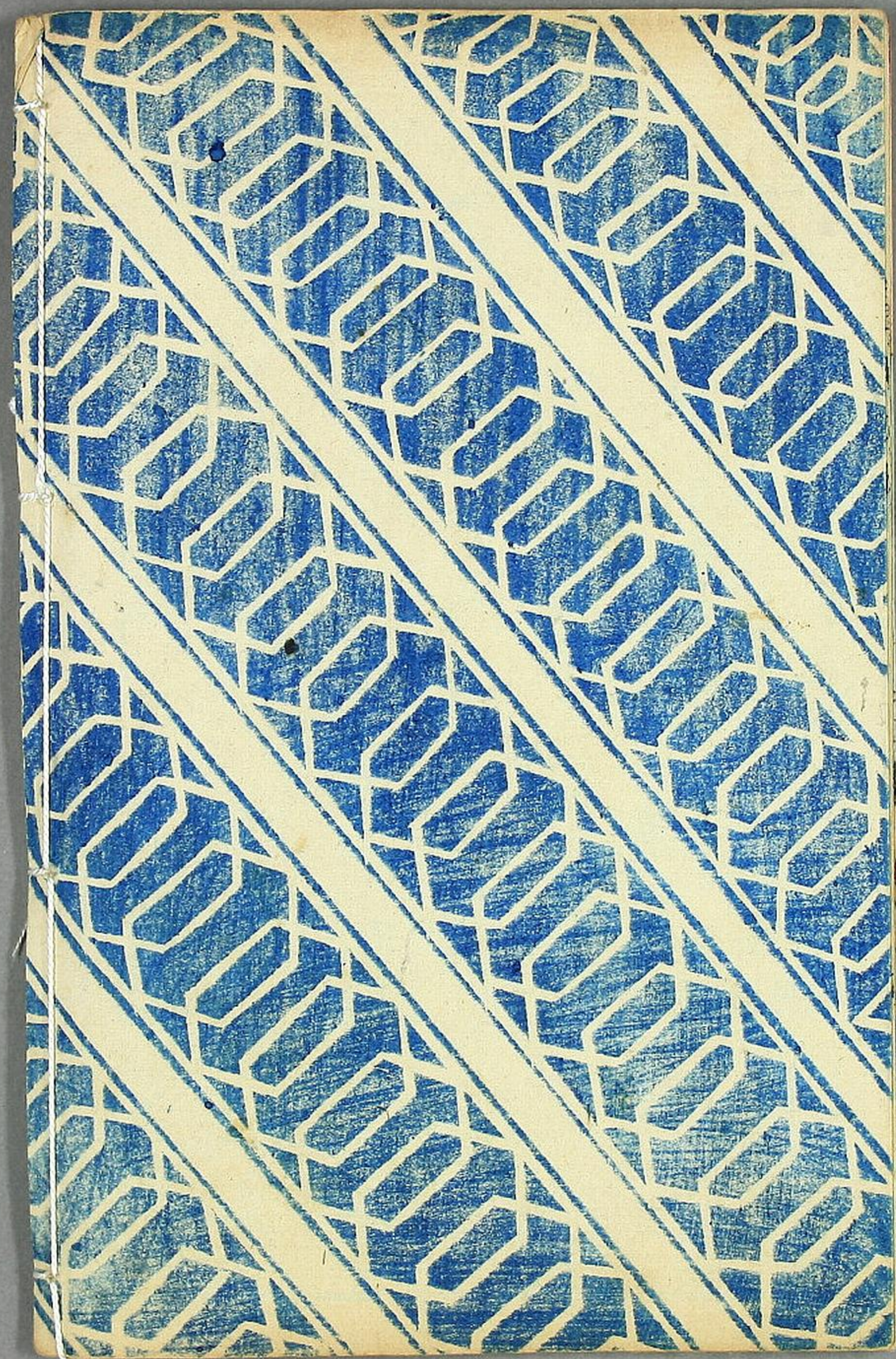
大功記銘々傳 四冊

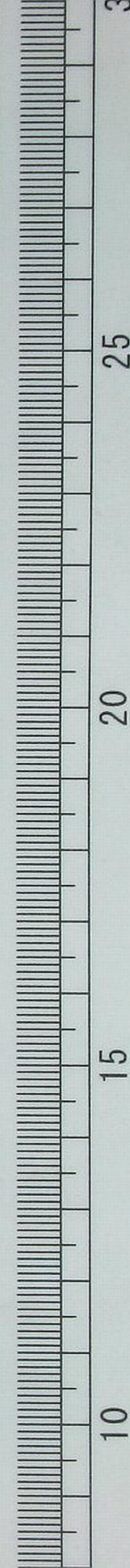
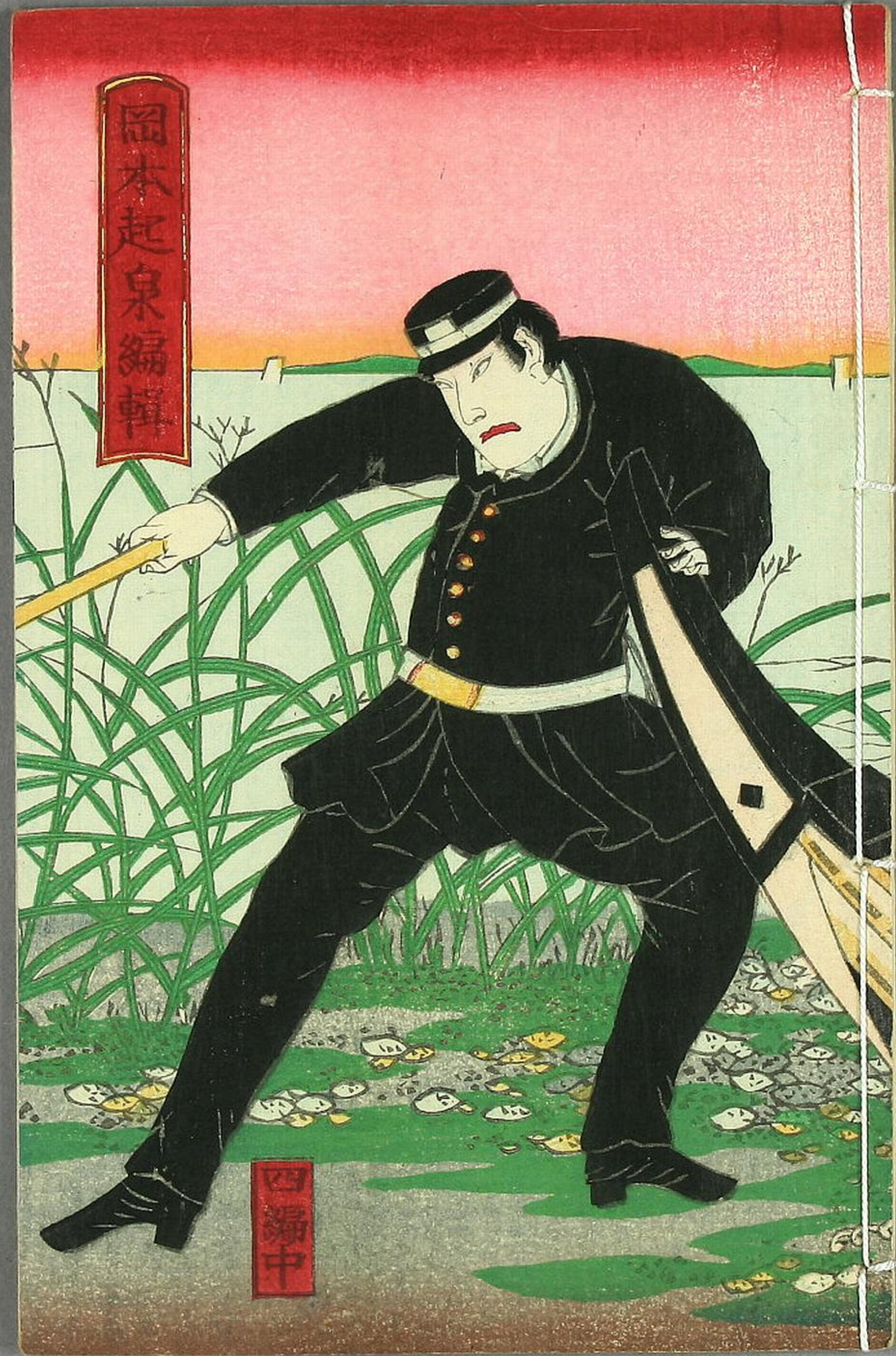
新板双六類品々

龜地本 錦繪問屋

靴町区一番丁番七番地 編輯人 岡本勲 造 浅草區瓦町十二番地 出版人 網島龜吉

010190511141













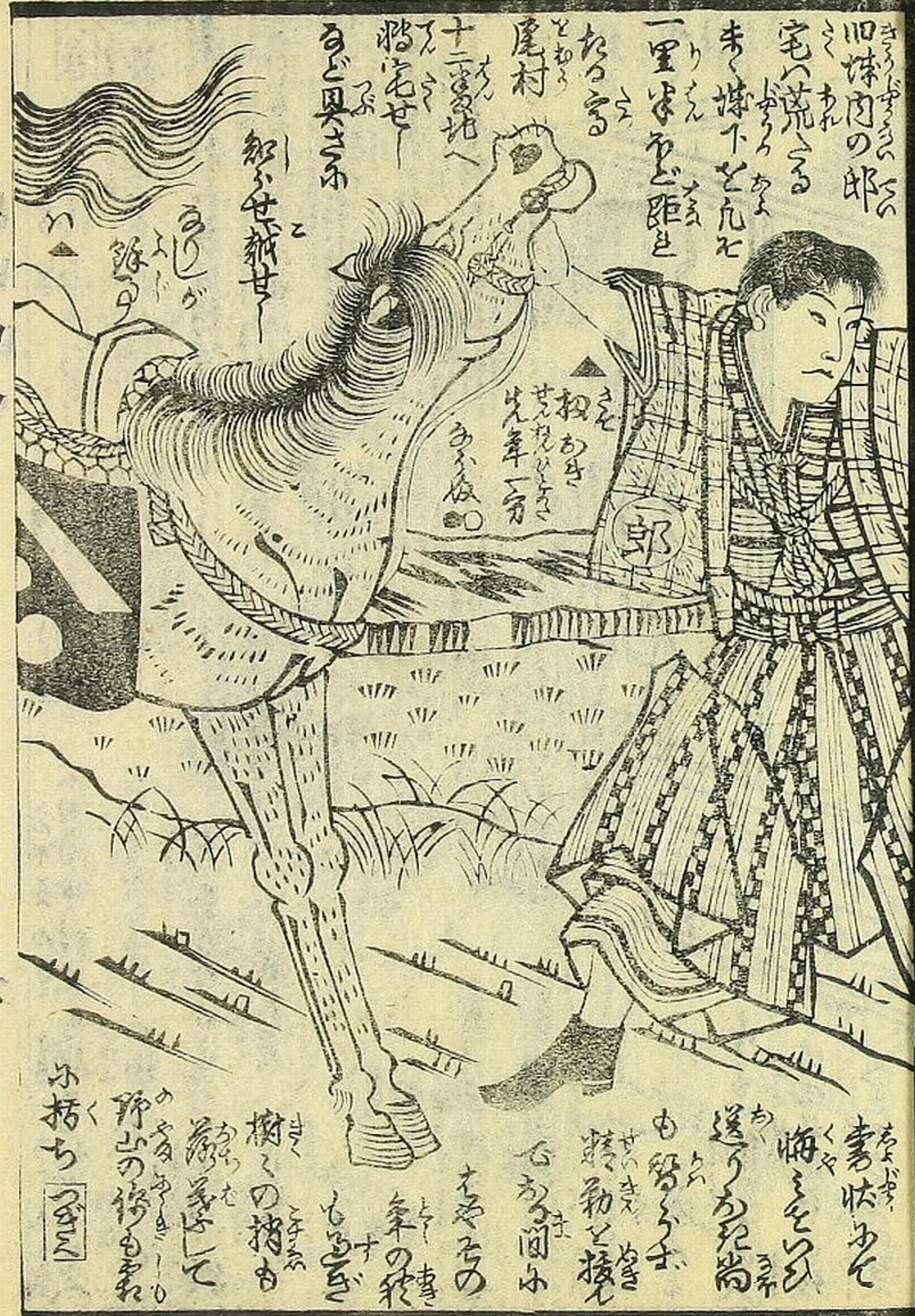






今十弟が死に  
 痛みのあまり  
 町茶は抱  
 死せしむ  
 船に身をまかせ  
 舟代ハ父の送  
 亡き人故あり  
 此本を療一  
 昔は家の娘と  
 胃一と長と改め  
 且小坂弟とよと廢一実  
 名の連豪と通称とほ  
 矮子と百替儀と替へ

受く  
 職と  
 身ハ  
 自  
 由  
 多  
 ね

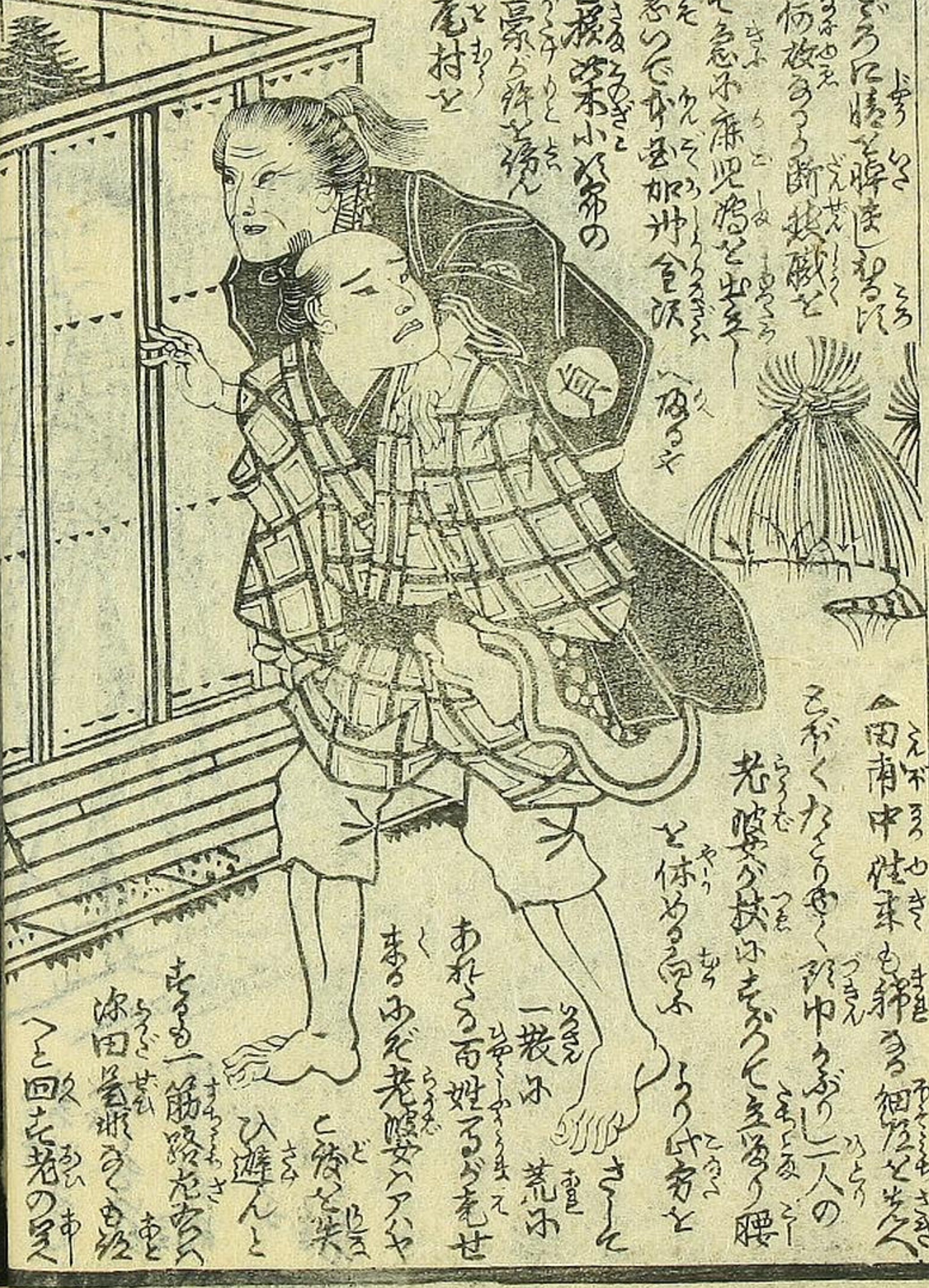


旧村内の邸  
 宅ハ荒る  
 未く膝下を丸と  
 一里半やと距と  
 尾村  
 十二番地ハ  
 粘りせ  
 ると具と  
 知らせ新甘

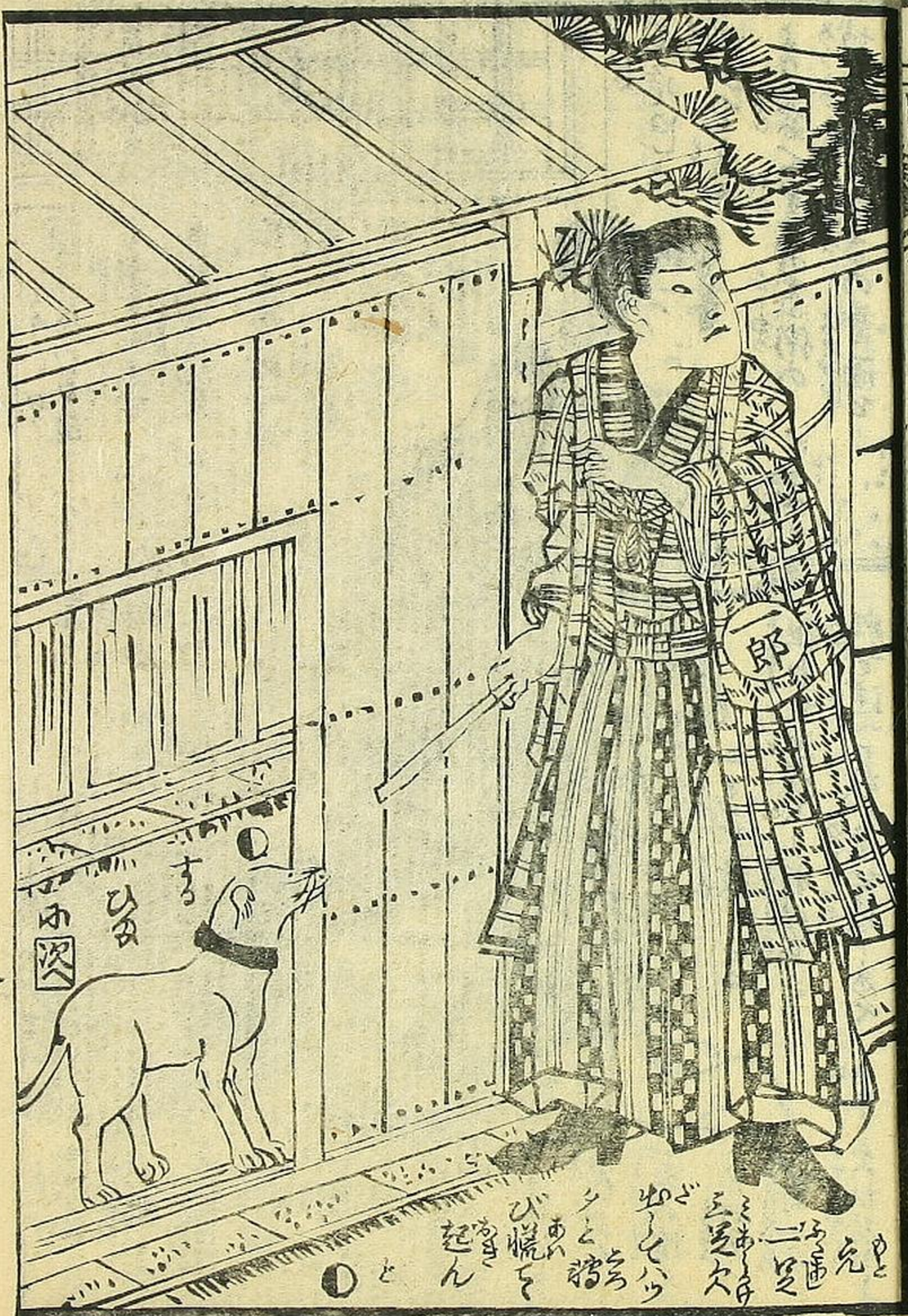
書状ありて  
 悔をこめて  
 送りたる尚  
 由留りし  
 精勤と接  
 心ある間小  
 志その  
 年の終  
 もらひ  
 樹の持由  
 野山の傍も  
 小柄ち

一帯に何故さう断絶致し  
 断絶して急小麻呂船を出し  
 途と急の七舟加丹會沢  
 長連豪と舟と傷ん  
 とる尾村と

の  
 途の  
 急の  
 急の  
 急の



田南中姓来も神宮細とせ  
 老婆の扶けをうけてまゐる腰  
 と休める向ふ



先  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十



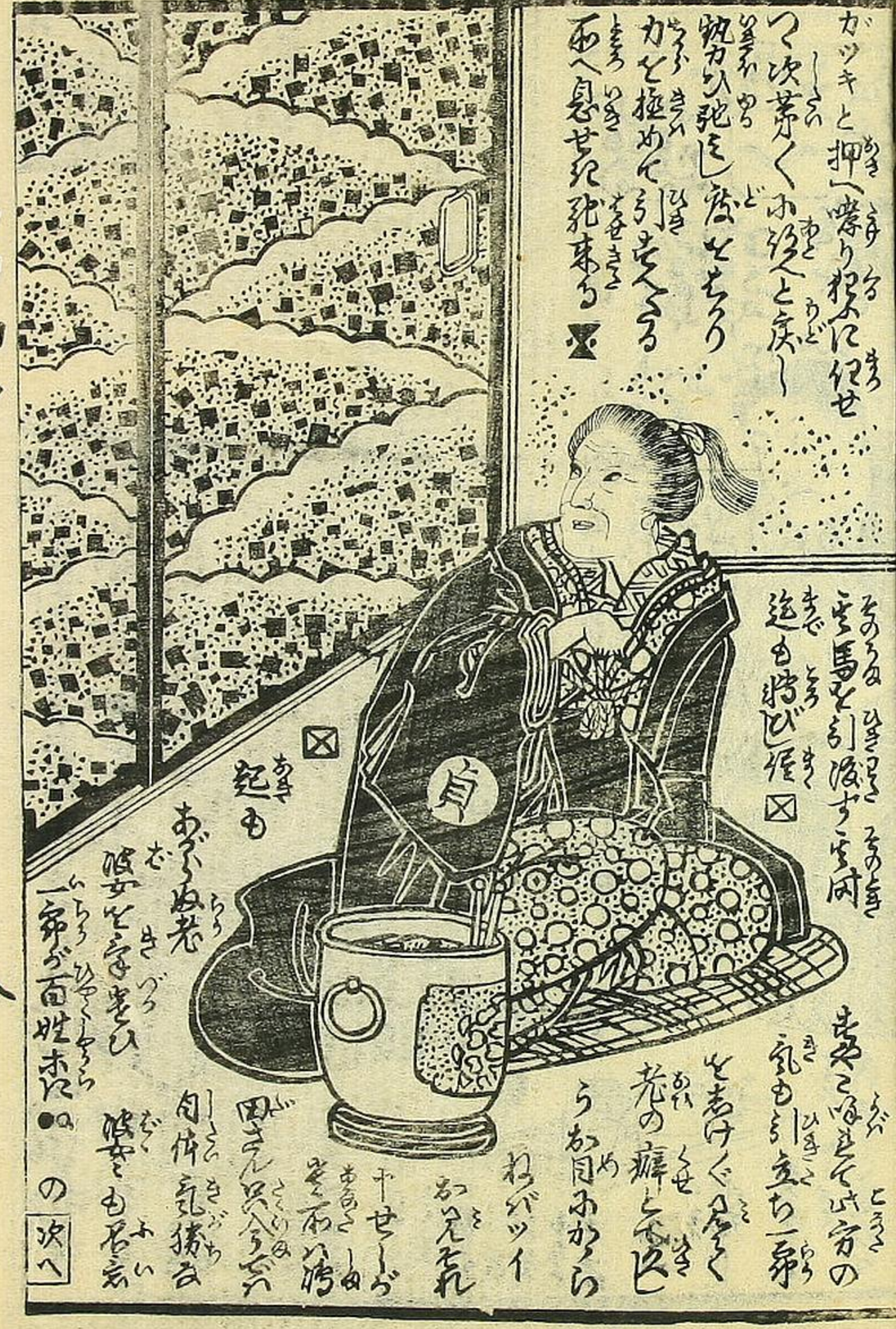
○危はと  
 叫びつゝあり  
 ろろ葉て葉ののる湖の  
 妙を花来るの書面と

く累をまて  
 あられ老酒の  
 歸ふあつて  
 累んろといふ  
 徳め一帯が  
 ヤレ老人

△二人の  
 百姓が初と  
 なるより大地  
 へ臥さぬ汁

△るを放し  
 粗おと流び入り  
 礼を迷へれば後と戒め

△搭巻と  
 引起しけ  
 常の道と  
 巾を取  
 て挨拶  
 志を新と  
 兄のあり  
 一帯の道と  
 乙菊屋の  
 初を欠ぬ

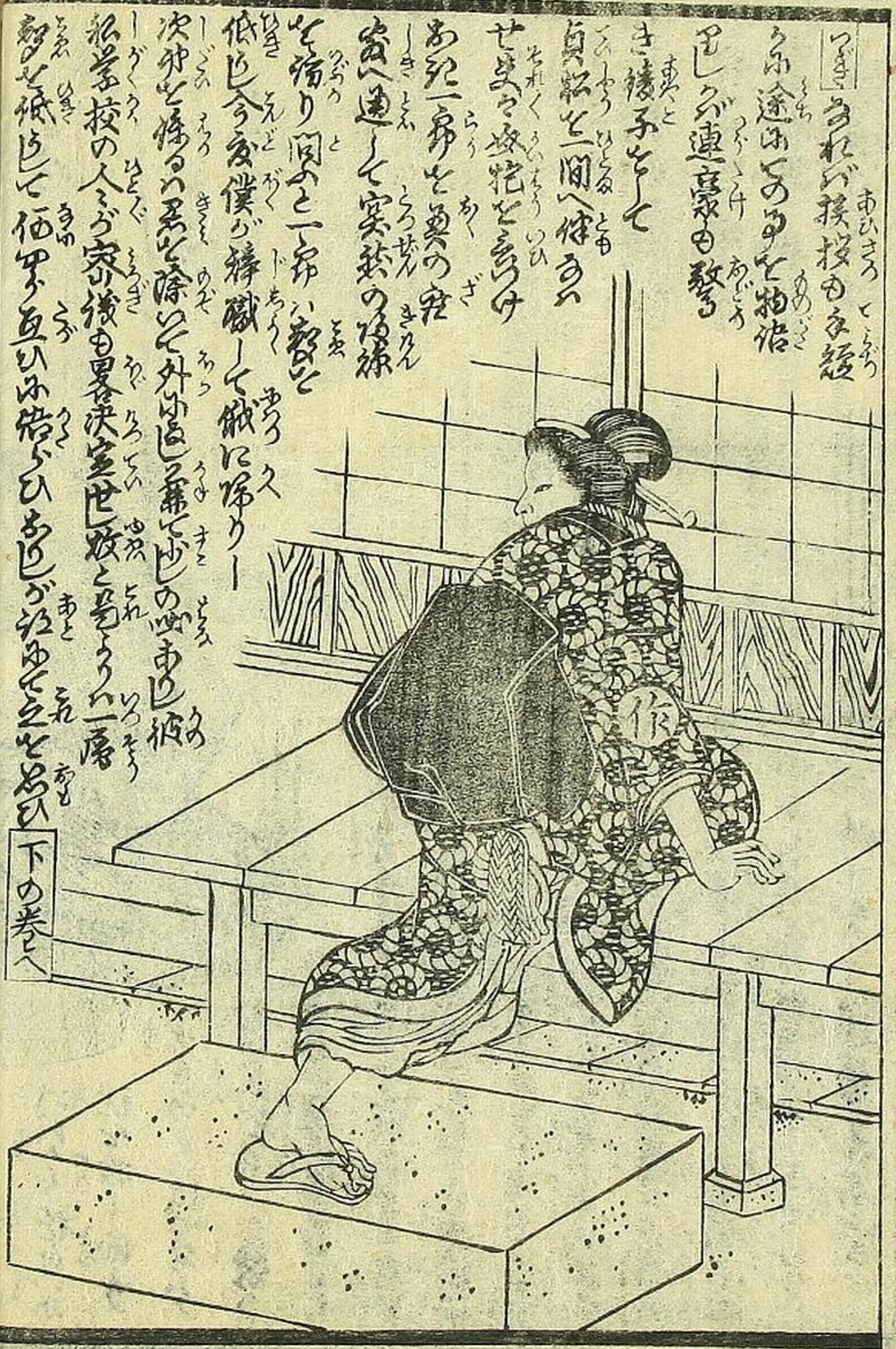


カツキと押し  
 つ次葉く小後と疾  
 執力以地は  
 かと極め  
 西へ息せぬ

△起も  
 あがぬ老  
 一帯が百姓未だの  
 の次へ

△おを  
 十せし  
 老の癖と  
 うお同おか  
 ねバツイ  
 かねを  
 田んぼ  
 自休を  
 一帯が百姓未だの  
 の次へ





此の如くは接投の経  
 糸途のゆゆと物治  
 正しく速豪の教  
 子様子とて  
 貞淑と聞へ侍あり  
 せまや夜花をまひ  
 あたし一房とあるを  
 宿へ通しと実終の縁  
 と宿り聞ふと一房の教  
 依り今も僕が辨獄して俄に降り  
 次仲と侍るの系と降の外は区番と少の由り也彼  
 松本校の人々が密後由夏決ま世故と尋らう一層  
 勢と依りて何事互ひ以借ひの色が如ゆとを以て  
 下の巻へ

東京区分繪圖全 鹿兒島紀事 六冊

命之養生善惡鏡全 島田郎梅雨日記 五編

其名の高橋 毒婦の小傳 東京奇聞 初編 彩色入小本 數品

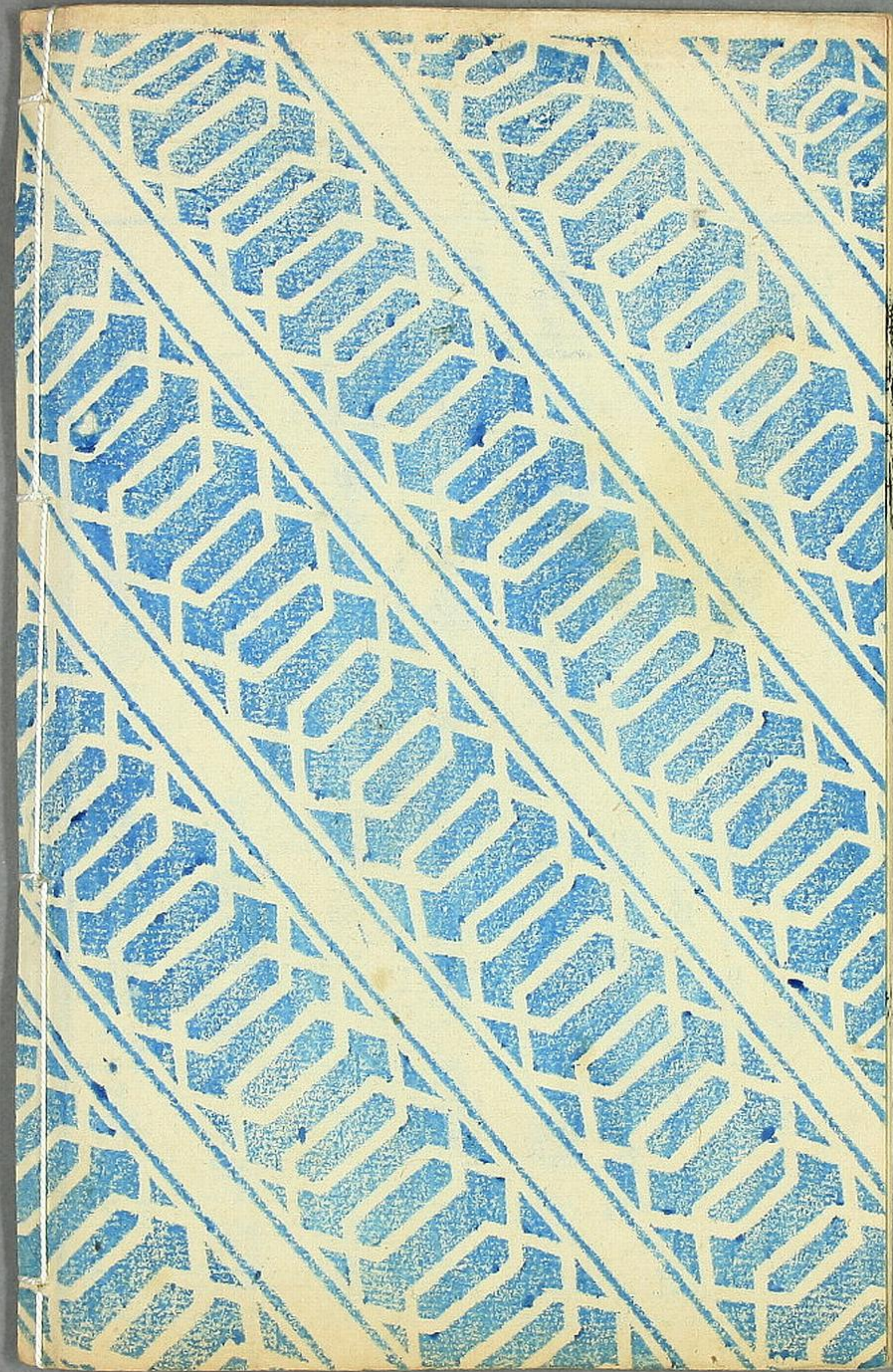
御所櫻梅松録 十編 仇優忠臣藏折本

大功記銘々傳 四冊 新板双六類品

龜 地木問屋 編輯人 岡本勘造 出版人 網島龜吉

010190511150





櫻齋房種圖書

島鮮堂壽様

四編下



10

15

20

25

30



志まき一節

梅日記

の海の下

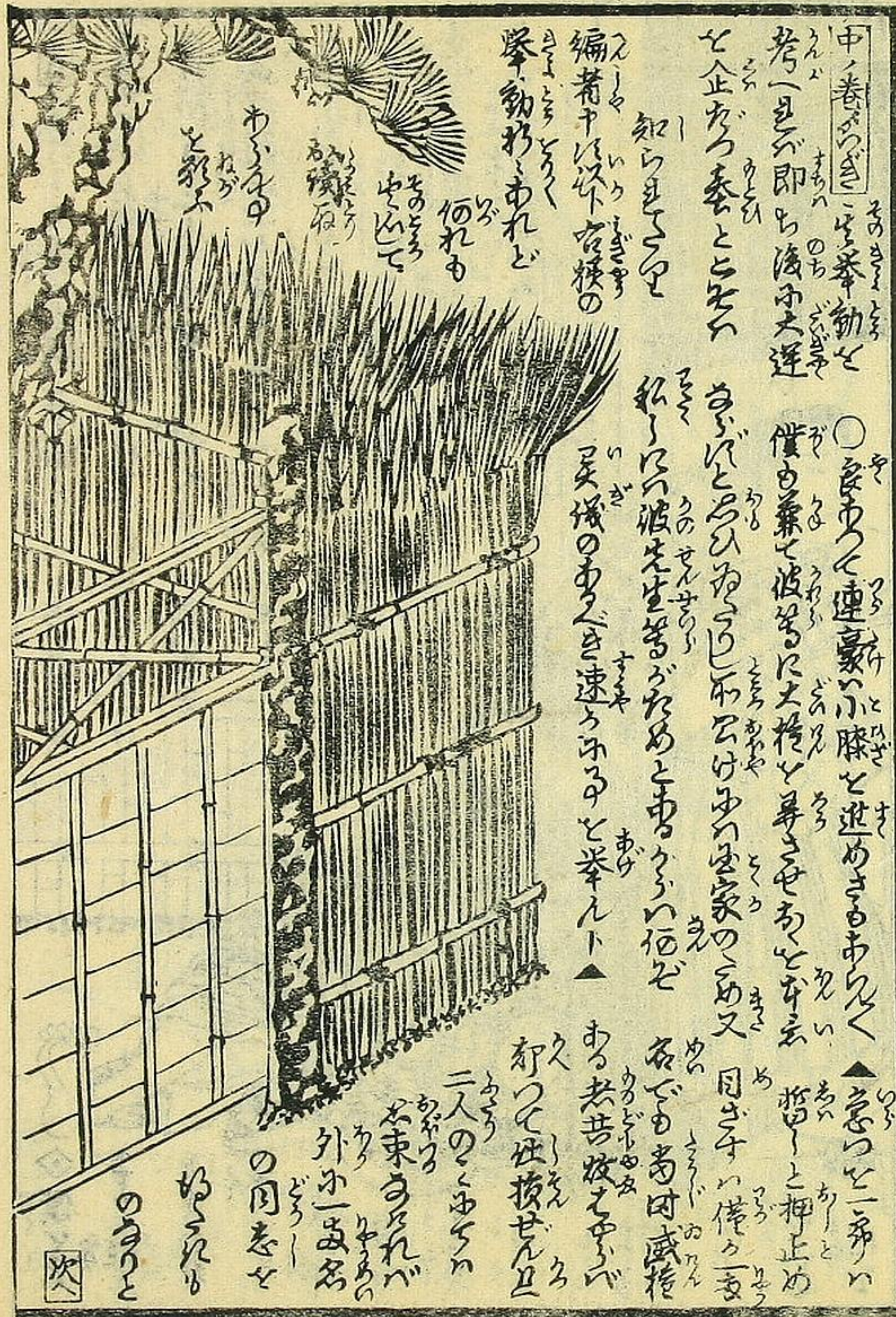
本清園

起水張

雪解中

春梅

梅の通



中巻の巻

考一且即ち海の大運

七止たつ春ととそ

知らむと

編者中以下古候の

筆勤抄あれど

何れも

中巻

わらわ

と

と

と

と

と

○意あつて連蒙小膝と進めさるる

借由兼て波をた上格と尋さるる

さげとさひあつて

私に波をさるる

異域のあつて速るふると

▲意つて一節の

哲一と押止め

目さすの備へ

名をもあつて

ある者放ち中ふ

都つては扱せん

二人のあつて

志東るはれ

外一及名

の同志

はるる

の

の

の

の

の

の

の

の

つきのつね、お藤子の外なる板先お相違して、藤子耳  
 あり世の中とよむ、何れも知らず、お相違くと、藤子  
 られ内なる二人の愛、驚き、慌て、藤子と聞かす  
 是か、お村文一か、おまの一人の女と、お藤子  
 立ち上り、おまの今、お藤子と、お藤子  
 のおま、お藤子、お藤子、お藤子  
 おま、お藤子、お藤子、お藤子  
 おま、お藤子、お藤子、お藤子



お藤子、お藤子、お藤子、お藤子  
 お藤子、お藤子、お藤子、お藤子  
 お藤子、お藤子、お藤子、お藤子  
 お藤子、お藤子、お藤子、お藤子



お藤子、お藤子、お藤子、お藤子  
 お藤子、お藤子、お藤子、お藤子  
 お藤子、お藤子、お藤子、お藤子  
 お藤子、お藤子、お藤子、お藤子

お藤子、お藤子、お藤子、お藤子  
 お藤子、お藤子、お藤子、お藤子  
 お藤子、お藤子、お藤子、お藤子  
 お藤子、お藤子、お藤子、お藤子







池辺士早郎

甜くあるは  
 時一糸目  
 せきと連真家  
 其れと暇り大松  
 及の容作とて系  
 れ利よりあふまを  
 鳴ちと徳子と共  
 近より一糸と共  
 膝と進ませ先利  
 其れを分る時と流  
 みる  
 波にともなふ今更  
 くら、いふねと花水

田及本平 同家  
 尚杉本  
 田の足利も後  
 き城とるる松橋  
 あひかへ人の後  
 庵と舎命とてのも  
 密使中司と後、は程に  
 杉本銀田もつ同家  
 世と人  
 後小八五人後と  
 むまび  
 死

前原一捨



西郷隆盛

桐野利秋

立條原國幹

ともい企て  
 小田  
 目六一  
 あり  
 の数  
 小後世  
 以文一  
 小後世  
 小田  
 小田

或日の子連喜  
 が梅の心  
 うほ井を有き  
 が大い  
 小條  
 あり  
 あり  
 あり  
 あり

政体不承と嘆きある  
梅考とも頼んため  
大福へ赴き九丹の  
物持と家づん  
と心と空め  
しが入

あつちあつちと嘆きある  
梅考とも頼んため  
大福へ赴き九丹の  
物持と家づん  
と心と空め  
しが入

あつちあつちと嘆きある  
梅考とも頼んため  
大福へ赴き九丹の  
物持と家づん  
と心と空め  
しが入

あつちあつちと嘆きある  
梅考とも頼んため  
大福へ赴き九丹の  
物持と家づん  
と心と空め  
しが入

あつちあつちと嘆きある  
梅考とも頼んため  
大福へ赴き九丹の  
物持と家づん  
と心と空め  
しが入



あつちあつちと嘆きある  
梅考とも頼んため  
大福へ赴き九丹の  
物持と家づん  
と心と空め  
しが入

あつちあつちと嘆きある  
梅考とも頼んため  
大福へ赴き九丹の  
物持と家づん  
と心と空め  
しが入

あつちあつちと嘆きある  
梅考とも頼んため  
大福へ赴き九丹の  
物持と家づん  
と心と空め  
しが入







○ 際ゆく 弱の足 撥へり  
 此奉由 於少の 流石  
 猫様と 其(め) 西南の  
 畠佐由 有軍の 猛威  
 不款し 有 宗倫令  
 なく 結威し 西郷  
 古く 先代 佐の 威  
 等由 委く 峰山 の大に  
 帰せし 一 等 等  
 恐懐み 誰より 再び 運去  
 と 燦んに まま 等  
 示し 合せ 竹田 村  
 油井 の 三 大 坂

つぎ 冬く 月と  
 厚 節 節 因と  
 信 小 城 一 尚も  
 後 同の 奉と 打合 母  
 乙 菊の 連 亦 全 海へ  
 帰り 一 回 密 小  
 信と 飛ら ち ち ね  
 どう 公 閑 止し  
 連 豪も 全 事 に  
 放 免と あり び び  
 矢 先 亦 速 ま ぶ 打 つて  
 矢 放 する 事 あ ら ん 大 事 の



○ 前 の 小 事  
 と 公 事 あり と  
 為 方 の 用 心 を 更 によ り れ と  
 何 れ も ね ぐ ち あり じ け  
 長 杉 本 頼 田 の 志  
 一 全 海 あり 如 糸  
 一 七 奉 と 儀  
 ら んと 次 後 せ  
 中 乃 杉 本  
 乙 菊 頼 田  
 功 一 の 足 亦  
 母 矢 頼 由  
 守 安 と 若  
 亦 頼 由  
 り 以 撥 へ ぐ  
 竹 田 を 五 五  
 と 公 事 後 じ け



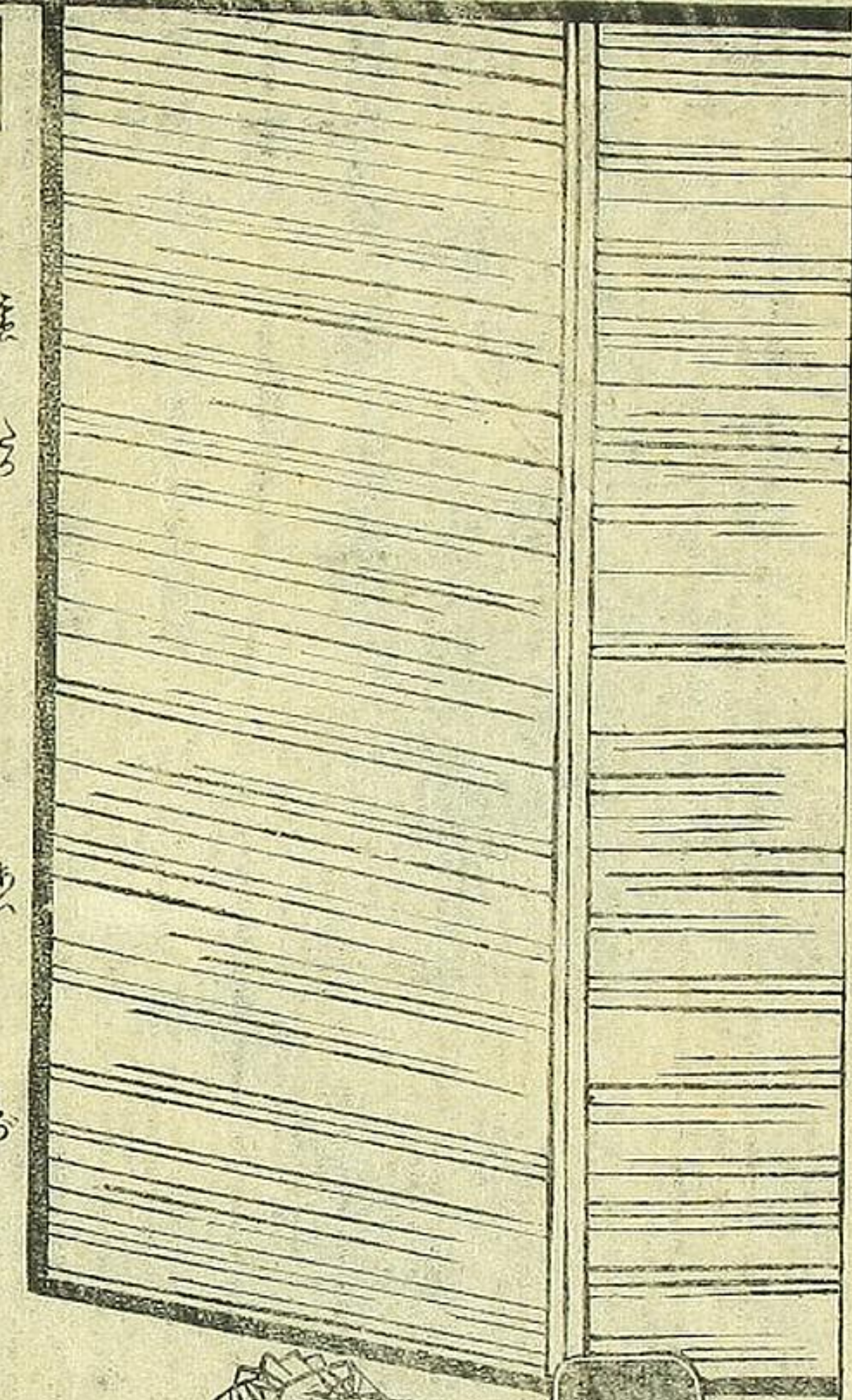
旅の  
用事  
も  
○ 旅り手整ひ  
兄弟一同内折臥す  
旅石は今宵か母  
カ別目とあひ出せば  
運命と云く云合まねば  
二人とも同トら小藤も  
やう木願七等〜起

○ 今も旅  
やうやうと足が  
長きに功一も  
たるとと推て  
暫く長足白楯  
ゆきあの敷る  
のまうと云  
信りか せうり覚悟せ  
あふあふの  
自由親子の  
あふあふ  
二人が共ふ世  
と云う  
と云う  
と云う  
おとあふとも



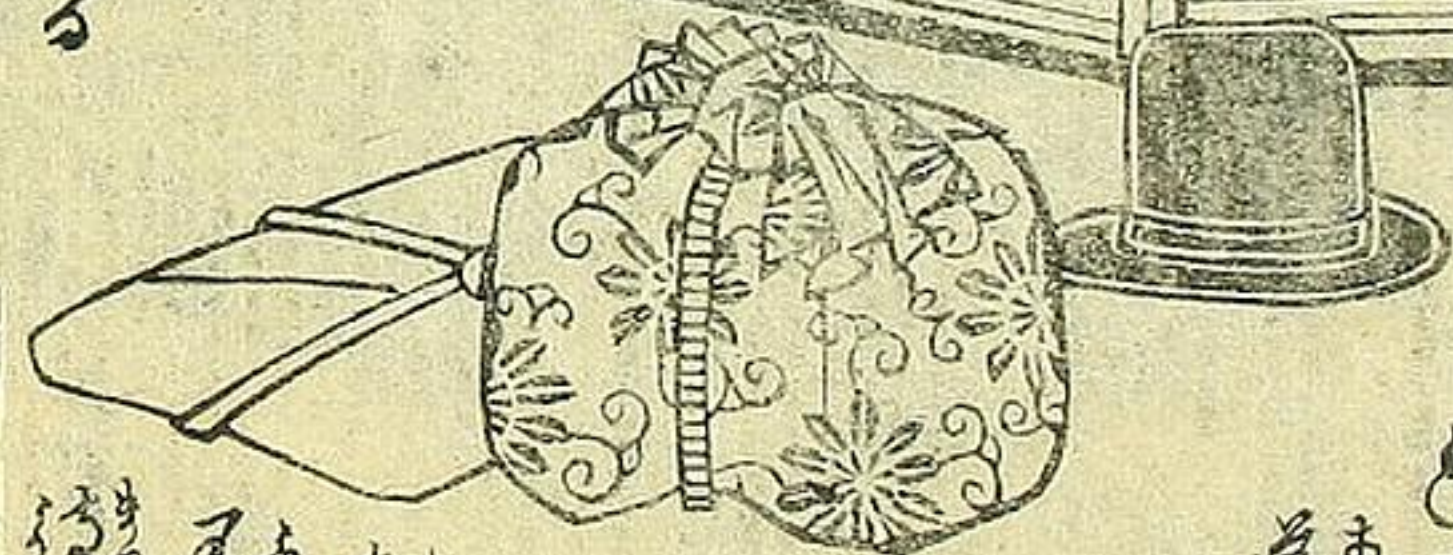
あがり決の一回とらうん  
母の熟睡の聲の響み  
安む〜 娘何に功一  
今更の女〜 娘小  
似られど今更秋〜 娘  
出帝のま〜 娘  
不惑とれと実とやさね  
首途う〜 娘  
母公ハ〜 娘  
船目うと清り〜 娘

○ 今も旅  
やうやうと足が  
長きに功一も  
たるとと推て  
暫く長足白楯  
ゆきあの敷る  
のまうと云  
信りか せうり覚悟せ  
あふあふの  
自由親子の  
あふあふ  
二人が共ふ世  
と云う  
と云う  
と云う  
おとあふとも



つぎおの老奴をさくせしおんづき様とく自うら  
 口を押し四辺を思うる次の回うら「ア大逆と企てる  
 免城ともを所一寸も動くまをひつろ福の候か  
 ある者あるあぞ二人の髪をさけつるまをひ  
 家人あふは合と軒の初あり母貞松を也

御明治十二年  
 届十月十日



○香きりのも  
 藤らんに生か  
 へ主出まを  
 ちるは坊の  
 猪尾のり  
 小ぶる次  
 編せのうく  
 大尾とまれば  
 不田の髪免を  
 侍て知り玉へ

東京區分繪圖全

鹿兒島紀事 六冊  
 よし切

命之養生善惡鏡全

獸類一覽かゝた

其名も高橋 東京奇聞 三冊 俵 毒婦の小傳 七冊 大尾

島田一郎梅雨日記 上中下入 五冊 後切

御所櫻梅松録 十編

仇優忠臣藏折本

大功記銘々傳 四冊

新板双六類品々

龜錦繪問屋

純町区一番丁七番地  
 編輯人 岡本勘造  
 茂草區瓦町十三番地  
 出版人 網島龜吉



馬田一郎梅雨日記第四篇

芳川春濤閣

岡本起泉綴

櫻齋房種畫

鳥鮮堂板

鳥鮮堂印

